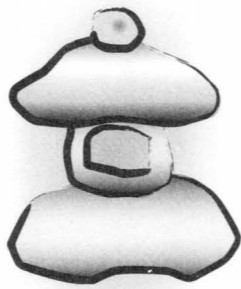




物心ついた頃から、「石屋のボン・ボン」と呼ばれてそれがいいのか、どうかもわかりませんでした。僕の記憶にある祖父は、毎朝4時に起きて仕事場へ自転車で行き、鞆(ふいご)を回してコークスを熾します。それから鉄ノミを焼き、整えることから始まります。母親が「朝が早いので大変やった・・・。」とよく言っていました。それ以上に軍隊生活が長かった為、曲がったことが大嫌いで、生活規律に対して非常にきびしい人でした。身内、他人さんと関係なく注意をするので、近所の子ども達が祖父の「替え歌」を歌っていたと祖母から良く聞きました。生涯一日も仕事を休まず、塵肺(石工の職業病)の末期になっても「仕事場で死にたい。」と言っていたのを覚えています。

石工の三代目。

親父も仕事一筋で、学校行事に來てもらった記憶はありませんが、年に一度お盆休みには一泊か二泊で家族旅行に連れて行ってくれました。中学生になった頃から、他でアルバイトをさせもたえず、休みの日は毎日墓地現場でセメント練りと基礎のグリ石を一輪車で1日運んでいました。夏休み期間だけでも4〜5キロは瘦せたと思います。高校を卒業する頃、前々から言われていた、愛知県岡崎市の石材問屋の親父が「でっち奉公」の為、家まで迎えに來られました。が、急に嫌になり大学を悪あがきで受けたら合格したので「仕送りは要らん。」と言って寮に入りました。しばらくは大学生活を楽しんでいましたが、そのうちつまらなくなり二年で辞め、いきなり岡崎の石材問屋に修行にいきました。三年半の修行生活は大変厳しく、三人部屋で年齢が下でも先に來た者が先輩で敬語を使わね



ばなりません。毎朝ノミ焼きから始まり、ノミの頭(破片)を体にかけてながら、春日灯籠など伝統的な灯籠造りを教えていただきました。仕事を終えると夜は訓練校の石材科に通い、入学時60人近くいた見習い仲間も厳しさの中、一人減り、二人減りで「年明け」卒業時には28人に減っていました。しかし、このとき学んだことは技術だけでなく、忍耐、向上心を養い人間形成にプラスになりました。20代で1級の国家試験(石張り、石積み、石材加工)を取得させていただいたのも、岡崎の見習い経験があったことだと感謝しています。



家業を継いで親父といっしょに仕事をしたのは僅か七年余りです。やはり石の粉が肺に溜る「塵肺」で胃がんも患って、僕が28才の時に一線から離れました。いきなり入院したので右も左もわからず途方にくれましたが、その試験のお陰で今の僕があるのだと思っっています。その中で一番の思い出はお寺の「釣鐘堂」の石垣修復でした。250年程前に造られた石垣を解体して組み直します。しかし、段取りをして、入念に墨出しをしても石垣の1分の違いが上段で1寸ぐらいの差になって出ます。何度も組み直して、親父が入院する前の見積りの倍近くの日数をかけて、やっと完成しました。昔の石工は現場に石を降ろして、ひとつひとつ積んでいったそうです。「これくらい・・・。」と思う心が後で大きな違いになることを痛感するとともに、先人の石に対する気持ちが少し理解できた気がしました。今は岡崎や庵治、真壁などの石の産地で修行する者がほとんどいません。安い外国製品におされて国産の石で造る職人さんは、ずいぶん少なくなりました。石工に限らず大工さん、左官さんも同じことだと思えます。日本の、日本人のものづくりに対する「ごころ」は、この先いつまで受け継がれるのでしょうか。

〜あとがき〜

明治四十一年創業 中山道高宮宿 tanakaya-communication
田中家通信
全優品 全国優良石材店

株式会社 田中家石材
VOL. 22
発行/株式会社 田中家石材
住所/彦根市高宮町1-08-1
電話/0749(22)5888
HP: http://www.tanakaya-sekizai.com/
Mail: info@tanakaya-sekizai.com

お正月のあれこれ 先祖様や祭神様をお迎えする日...

お正月もお盆と共に、本来はご先祖様をお迎えする魂祭(たままつり)の行事です。「おせち料理」は「節句」で神にお供えする食物の意味で、ご先祖様の霊と歳神様を迎えて共に頂く食事のことです。お正月のお雑煮は、お供物のお下がりを皆で食べる食べものなのです。また、初詣は、大晦日から社頭に籠って歳神様をお迎えするという行事が変形したものです。

年末には今年一年お守りいただいたことに感謝する意味で、お寺にお参りするのも良いことです。その際は今年のお札類を持参して、お焚き上げをお願いすれば良いでしょう。そしてお正月に氏神様、お寺のご本尊様とお墓にお参りをして御祈願すれば、清々しい気分です。新しい一年の第一歩が踏み出せるはずですよ。

御年始と御年賀の違い

正月三日間にご挨拶する行為を「お年始」と言い、その時に贈る物を「お年賀」と言います。ですから「お年始」に行けないから代わりにご挨拶を書いたため贈る物を「年賀状」と言います。

時期ですが、年始ですから基本は三日までですが、遅くとも元日〜十五日までとなっています。

「謹賀新年」と「賀正」の使い方

「賀正」、「迎春」など、漢字一文字、二文字の賀詞は、目上の人が目下の人に新年のお祝いをするという意味で使われることが多いようです。

目上の人には「謹賀新年」「恭賀新年」等の漢字四文字の賀詞を使うことが望ましいとされています。



一切唯心造

清も濁もすべては心がつくりだすもの

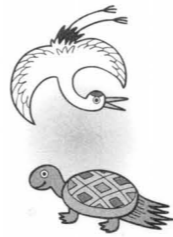
江戸中期に生きた臨済宗の高僧、白隠の逸話があります。あるとき若い武士に「地獄の有無」を問われた白隠は、口を極めて罵倒し始めました。あまりの屈辱に耐えかねた武士が刀を手に白隠に斬りかかろうとした瞬間、白隠は「そこが地獄よ！」と一喝します。

我に返った武士が「地獄の所在、しかとわかりました」と平伏すと、白隠はにっこり笑い、「そこが極楽よ」と言ったということでした。地獄も極楽も私たちの心の中にあり、心がつくりだすものにほかなりません。すべてはあなたの心のあらわれだからこそ心を清く保つことです。

一休さんと、蓮如さん

ある日、一休さんから蓮如さんに手紙が届きました。長い手紙の最初に「あれこれ」と書いてあり、ずつと「あれこれ、あれこれ」と続いていた。そして最後に「とかくこの世は忙しい」と書かれていました。なるほど、毎日毎日「あれもしなければ、これもしなければ」と、考えただけでも、とかくこの世の中は忙しい。蓮如さんはさつそく返事を書きました。一休さんが読んでみると、最初に「ねてくて」と書いてあり、その次もその次も「ねてくて、ねてくて」。そして最後に一言、「そして棺桶」と書いてありました。「あれこれ忙しい人生において、私たちがしていることは、寝て食って、寝て食って、そして：死んでいく」ということです。

光陰矢のごとし、人生はあつと云う間に過ぎていきます。せつかくこの世に生まれて來たのですから毎日を大切に、味わい深く生きていくことが大切だという一休さんと蓮如さんからのメッセージです。
浄土真宗本願寺派 龍泉寺住職



龍泉寺住職